

飼料用米の鶏への給与技術

家畜の飼料原料は、その多くを海外に依存しているため、非常に厳しい状況にあります。そのため、飼料用穀物原料を米で代替えし、国産化することによって、畜産農家の経営の安定化と飼料自給率を上げることが重要です。そこで、牛用として普及が進んでいる飼料用米を、鶏用飼料として用いる方法を開発しました。

採卵鶏(卵とり用の鶏)の飼料に、飼料用米品種「北陸193号」を20%配合した場合、産卵性や卵の質は良好でした。そして、40%まで配合が可能でした。また、肉用の鶏においても成長が良く、飼料費も低減できました。

1 給与した飼料用米

飼料専用品種「北陸193号」は10a当たり収穫量が1,000kg(もみ米)を超え、食用米の1.5倍以上もあります。また、省力化技術の開発も進んでいるため、低コスト生産が可能です。



左:北陸193号
右:日本晴

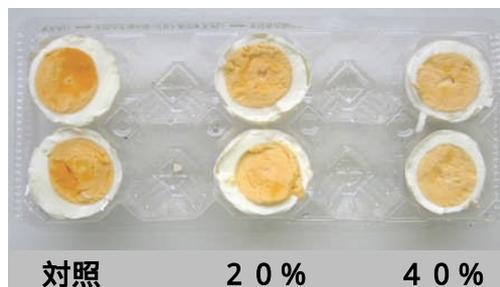


【飼料用米と食用米のもみ】

2 採卵鶏への給与

40%配合では、右の写真のように卵黄色が薄くなりますが、キサントフィル(色素)を添加することで調節できます。

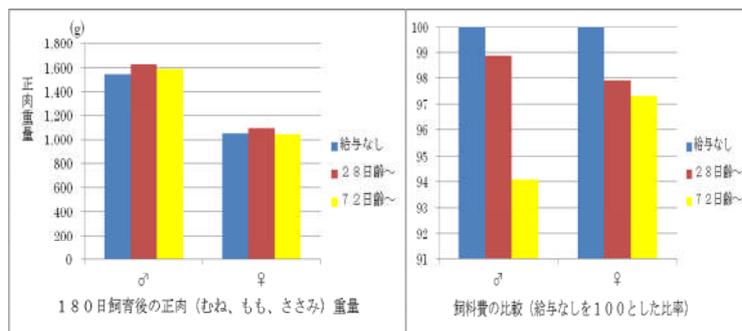
*配合量が20%を超える場合、カルシウムの不足による卵殻質の低下を防ぐため、カキ殻を飼料に添加しました。



【50週齢時の卵黄色】

3 タマシャモへの給与

米を給与しても肉色は変わらず、正肉(もも、むね、ささみ)量は増加する傾向がみられ、また、飼料費を抑えられることもわかりました。



【180日齢時のもも肉()】